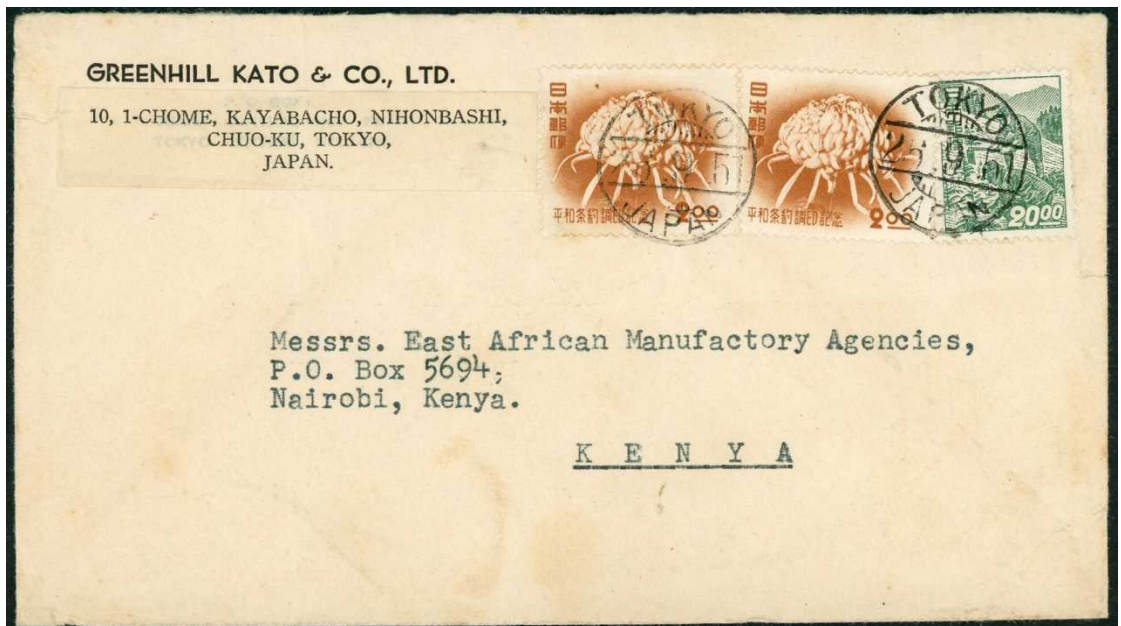


封筒に貼られた切手の透かし分類

永吉 秀夫



(A) 第4地帯あて2倍重量航空便(料金230円=平面路料金24円+航空増料金103円×2)
TOKYO 1951.3.31 → 英国



(B) 船便書状料金24円 TOKYO 1951.9.26 → ケニア

新昭和切手のうちの2種(4円はつかり、10円螺鈿)、産業図案切手のうちの8種(2、3、6、8、20、30、100、500円)については、当初の透かしあり用紙を使って製造されたもののほかに、1951年以降透かしなし用紙で増刷された切手があります。「昭和透かしなし切手」と呼ばれることもあります。収集家の観点では当然別種の切手ということになり、カタログでもメインナンバーで分類されています。

未使用切手やオフカバーの使用済切手の場合、時に透かしが見にくい場合もありますが、それらの分類はまあ容易です。しかし封筒や葉書に貼られた状態で両者を分類するには、どうしたらよいでしょう？

先輩の収集家からは、封筒の中にペン型の懐中電灯を突っ込んで透かしを試みるという方法を教わったことがあります。しかしなかなかうまくできません。葉書の場合はお手上げです。昔の指導書には一度水はがして... などという方法も書いてありましたが、なかなかそんな決断はできませんね。切手ごとに初期と後期の紙質や刷色の特徴をよりどころにして分類することも、ある程度可能ですが、万能というわけにはいきません。

前ページ上側(A)の多数貼りカバーは簡単です。消印が透かしなし切手出現よりだいぶ前なので、間違いなく透かしありです。ただしこれを上記の方法で透かしを試みても、封筒の地模様が邪魔になって透かしを確認することはできません。普通であれば24円+キジ航空103円×2、または普通切手100円×2+30円貼りとするところですが、30円切手を目一杯貼ってあるところが嬉しくなります。

次の(B)、24円貼り船便封筒に貼ってある20円植林は、透かしなしでしょう。紙の白さは(A)と同じくらいですが、この薄い刷色は透かしなし切手のひとつの特徴です。透かしそのものは、もちろん確認できません。

右の4円切手5枚貼りは、時期的には透かしなし切手の時代ですが、紙質は灰白紙風で、どうも透かしありのようです。実際、上から2枚目と3枚目の切手はつながっていて、封筒ごと透かしてみると、これらには何とか透かしらしきものが確認できました。



(C) 2倍重量書状料金20円 左京 S28(1953)82